



歴史



■中央公論新社
■2018年11月刊
■定価 880円+税

宣教のヨーロッパ

大航海時代のイエズス会と托鉢修道会

佐藤 彰一 著

イベリア半島におけるキリスト教徒軍によるレコンキスタ(国土回復戦争、718年-1492年)、その後のスペインとポルトガルが覇権を求めて覇を削った大航海時代において、スペイン内外で活動した修道会は、3つに分類できる。

13世紀初頭創立の、自ら福音の中のキリストの清貧に従って信仰真理を巡回して福音宣教する托鉢修道会(ドミニコ会、フランシスコ会、アウグスティヌス会)の福音宣教対象は、ヨーロッパ全域、その後宗教改革の大騒動とは無関係の新大陸とアジアへと広がった。次いで、13世紀後半創立の修道騎士会(カラトラバ会、アルカンタラ会、サンティアゴ会)は、イベリア半島でイスラム勢力を放逐するレコンキスタのための好戦的宗教騎士団であり、戦闘と獲得した領土の維持・開発・植民を任務としていた。この3宗教騎士団の膨大な収入、軍事的・政治的重要性に注目したアラゴン王フェルナンド2世は3騎士団の団長職に就き、1501年、ローマ教皇アレクサンデル6世によって認められる(余談であるが、17世紀になって、貴族の中でも特別な意味を持たせるために、古くからキリスト教徒である「血の純潔」が証明された者だけが入団許可が

下りた)。

そして1534年にイグナシオ・デ・ロヨラと教人の同志(ザビエルを含む、全員が司祭に叙階されていた)が創立したイエズス会は、教皇への絶対的忠誠のもとで、対抗宗教改革の中核を担って、ヨーロッパにおける台頭期のプロテスタントからの失地回復、次いで大航海時代に新大陸とアジアの布教へと進む。

イエズス会は、新大陸とアジアにおいては、前記の托鉢修道会の後塵を拝する立場であるが、その宣教活動において両修道会が重複しないよう、活動領域の棲み分けを行った。

ザビエルが先鞭をつけた日本における布教に関しては、イエズス会が独占的立場を堅持していた。さらに1579年にイエズス会東インド巡察師ヴァリニャーノが日本を訪問した際に、独特な布教指針を提示し、イエズス会の布教の要諦として刻印されることになったものがある。非キリスト教社会における「順応政策」と称されるもので、「改宗とは自らが別の文化に回心し、それを見習い、順応すること」である。イエズス会はこの「順応政策」主義布教に固執したために、托鉢修道会との間に軋轢を生んだ。両修道会の日本における布教地域の棲み分け——イエズス会は主

に長崎、フランシスコ会は主に関東地方——が行われていたが、両修道会の乖離・反発は途轍もないものだった。例えば、1597年2月5日、長崎西坂の刑場で、2人のいたいけな少年を含む26人のキリシタンが処刑される。フランシスコ会修道士は6人、イエズス会で受洗した信者は3人であったが、この殉教事件はローマでイエズス会によって、イエズス会の殉教として大々的に喧伝されたのだった。また、1614年、伊達藩主伊達政宗の命を受けて、フランシスコ会のソテロ神父を副使として、支倉常長団長の慶長遣欧使節団は太平洋を経由して、はるばるスペインとローマを訪問したものの、使節団本来の使命は烏有に帰したのだった。それは事前にライバルのイエズス会修道士が使節団を誹謗中傷していたからだだった。

一般論であるが、ザビエルと後継のイエズス会の活動期は、戦国の真っ只中で、大名の群雄割拠の状況と南蛮貿易を利用して宣教活動ができたが、托鉢修道会の宣教師が日本に到着した頃は、日本では政治的国家統合が進み、専制主義体制の確立期に当たったために、キリスト教の布教は一段と困難となってしまった。

哲学



■中央公論新社
■2018年4月刊
■定価 900円+税

戦国日本と大航海時代

秀吉・家康・政宗の外交戦略

平川 新 著

1492年のスペイン。キリスト教徒軍によるイスラム勢力の放逐を目論むレコンキスタ(国土回復戦争)は、最後のグラナダ王国の無条件降伏によって終結した。実に800年におよぶ「西の十字軍」戦争だった。

さらにこの年、コロンブスの「西インド諸島」到着とスペインの新大陸征服があり、スペインとポルトガルが覇権を争う大航海時代が幕を開けたのだった。その2年後の1494年、ローマ教皇アレクサンデル6世の仲介によって両国が独善的なトルデシヤス条約を締結し、地球を二分して支配する「世界領土分割」体制が屹立する。教皇が要望したキリスト教の布教活動とスペイン征服戦争が一体化し、1502年から40年間に、中南米で2,580万人もの先住民が犠牲となった。スペインはこうした犠牲者から奪取した土地を「神からの授かりもの」と称し、自らの行動を神聖な「正義の事業」とみなしていた。さらに1580年、ポルトガル国王が空位になった際、当時のスペイン王フェリペ2世の母親がポルトガル王女イザベルだったので、彼は相続権を主張し、ポルトガル王フェリペ1世として即位する。スペインはポルトガルを合併し、世界一の植民地大帝国「陽の沈むことなき大帝国」になる。

超軍事大国スペインがなぜ群雄割拠する戦国時代の日本を植民地にしなかったのか? マルコ・ポーロ以来というべきか、それよりもすでに聖書の時代においてキリスト教徒たちは、信仰の中心であるエルサレムは天と地にかかっており、エデンの園はアジアのどこかに咲いていると固く信じていた。しかし、アジアについて確かなことは誰も何も知らなかった。しかも何世紀もわたりイスラム圏という強力な政治的・文化的衝立の向こうにある世界、神秘に見えたアジアは紛れもなくキリスト教徒にとって「異境」であった。陸路が無理なら海路で。当然の理屈だ。イベリア半島において、「レコンキスタ」に完勝したスペインとポルトガルが次にアジアに貪欲な目を向けた。コロンブスを嚆矢として、多くのヨーロッパ人がアジアに蝟集した。彼らの垂涎の的だった「ジパング」こそ、いとも容易に占領できたはずである。この重大な問題は、日本史学界において等閑に付されてきた。

本書によると、秀吉は、2度の計30万人の兵力による朝鮮出兵に前後して、フィリピンのスペイン総督、ゴアのポルトガル副王に対して服従を強要し、両国より先んじて明国征服、天竺(インド)掠奪を宣言した。この秀吉の軍

事行動を問の当たりを見て、スペインは日本の武力制圧を断念し、キリスト教の布教による日本征服へと大きく路線変更する。確かに家康も南蛮貿易と禁教との間で揺れ動いていたようだが、1615年に大阪夏の陣で勝利して以来、国家統一を確立し、毅然と禁教を公布した。政宗は家康の許可を得て1613年に慶長遣欧使節団を派遣するが、通商交渉に失敗して帰国した途端、政宗は領内にキリスト教禁制を布告した。

さらにもう1つの俄かに信じがたい重大な事実。東洋で活動中のスペイン人をはじめ、ポルトガル人、後続のイギリス人、オランダ人たちも、自国宛ての公的書簡の中で、秀吉や家康を「皇帝」、日本を「帝国」と呼んでいた。当時ヨーロッパで「皇帝」や「帝国」という呼称を使えたのは、唯一、神聖ローマ帝国だけだった(スペインでは、国王カルロス1世が、1519年、神聖ローマ帝国皇帝カール5世として即位した)。大航海時代のスペインは「王」に統治されていたにすぎず、これでは「皇帝」と干戈を交えることはできなかったのだ。

本書は、戦国時代から初期の江戸幕府までの外交戦略史を理解する上で裨益すること大であると強調しておきたい。

書評



川成 洋
Yo Kawanari
プロフィールp.8